

奨励金受賞を今後の糧として

西 銘 宜 正*

今回の受賞は、私にとって身に余る光栄なことで、びっくりすると同時に恐縮しています。応募のきっかけは、教育センターの大城逸朗主事から「今後も気象について教育現場で活動していく節目にしたらどうか」と勧められ、気軽な気持ちで応じたものでした。3年前、教育センターで雲を素材に研究を行い、学校に戻ってからは生徒達と自由研究を共にとりくみながら雲の継続観察を行ってきましたが、まさか気象学会から奨励金を授与されるとは思ってもみませんでした。教育実践にしても、理論研究にしても未熟な私には大きすぎる受賞でした。それだけに、近ごろはこの受賞の重みがずしりと肩にかかってきます。今後は“中途半端な実践は許されないぞ”という思いです。

さて、最近では学校の授業がやりづらく、私達理科教師も悩みが多いものです。受験戦争や塾の先取り学習などの影響のためか、結果重視の傾向が子供達の中にあり、自然の事象・事物に対しても、興味・関心が薄くなっているような気がしてなりません。又、高度な情報化時代の中で、多様なマスメディアを通して映像化された科学情報が居ながらにして注入されてもいます。そのため、知識量はグーンと拡大されているが、物事を深く思考することが段々苦手になっているように思われます。もちろん、私達教師の授業内容に対する取り組みも、多に反省し、研究しなければなりません。そして、感受性豊かで記憶力・吸収力が伸び盛りの生徒達に、たっぷり自然に触れさせ、「不思議だな」「なぜかな」「調べてみたいなあ」という意欲を作り出し、理科の好きな生徒をたくさん作りたいと思っています。

私は、雲についてせいぜい数種類しか識別できず、授業になってあわてるが多かったのですが、教育センターで研修を始めてから次第に雲という素材の奥深さに

気がきました。まず、網雲ひとつとってみても、そのかたちは針状・羽毛状・ペール状・コンマ状など多様です。教科書や図鑑の典型的な写真しか知らなかった私には驚きでした。又、昔の漁師達が雲を観て天気の変化を予測したという観天望気の言伝えを実際に追体験し、いくつか実証できた時、直接天気変化に関わっている雲の存在の大きさを再認識しました。

その後、生徒にも直接観察できる素材として、雲の観察や写真撮影を授業や自由研究の中で取り組ませています。その中で、雲に興味関心を持った生徒達が約1年間継続観察を行いデータを整理しました。佐敷町内で見られた年間雲のベスト10や、季節変化と雲の発生状況、積乱雲の発生条件、観天望気との関わりなど、中学生らしい目で研究した作品が科学作品展で優秀な成績を収めました。第33回全日本学生科学賞（読売新聞社主催）では、入選一等を受賞し、生徒3人は喜び一杯に東京での受賞式にも参加しています（平成2年1月21日）。彼らは、研究の最後に、

「雲の研究では、まだ本を1ページめくった程度だろう。今後ももっと調べていきたい」という感想を書いています。

私は、今後も自然に対し関心を持って探求していく生徒を育てていきたいと思ひます。そして将来、地球規模で気象現象を考え研究活動する人が出ることを期待しています。

今回の受賞を、今後の教育実践の糧として生徒達に自然の事物・事象を体験させ、興味関心を持って主体的に探求していく理科の授業づくりに努力していきたいと思ひます。

気象学会奨励金受賞に際して、指導助言して下さった大城逸朗先生および推薦して下さいました沖繩支部に、感謝の意を表します。

* 沖繩県佐敷町立佐敷中学校教諭。